



TITLE:

<批評・紹介> 矢野仁一著「長崎市史」通交貿易編東洋諸國部

AUTHOR(S):

堀井, 一雄

---

CITATION:

堀井, 一雄. <批評・紹介> 矢野仁一著「長崎市史」通交貿易編東洋諸國部. 東洋史研究 1939, 4(3): 269-274

ISSUE DATE:

1939-03-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138783>

RIGHT:

長崎市史  
東洋諸國部

通交貿易編

矢野仁一 著

昭和十三年十一月五日發行  
菊版七一九頁、圖版二二葉  
長崎市役所發行

反省は進歩の母體である。反省なき所に進歩は期待

されない。世界史に一時期を劃すべき今次聖戦も、愈々建設の段階に入つて、一方には日本の大陸經營の策が論議されると共に、他方には日本と大陸との文化的經濟的交渉の反省が要求される時代となつた。明徹なる反省を俟つて健全なる大陸發展は可能である。かゝる意味に於いて、長崎港貿易史、換言すれば鎖國時代の日本貿易史の問題も、亦現在の時代的要求に即應した研究と言ふべきである。

長崎貿易史の研究は從來決して少ないとは言へない。内田銀藏、淺井虎夫、田保橋潔、福地源一郎、岡本良知、岩生成一、中村吉治、本庄榮治郎、柴謙太郎、小葉田淳等の諸氏が、或は概論的に、或は論證的に、その研究を發表せられた。然しながら從來の研究は和蘭側の史料、日本側の史料に據つたものゝみであり、偶々支那側史料を引くものも、その一二句を例證とするに過ぎなかつた。

言ふ迄もなく長崎貿易の取引國が、和蘭のみならず支那大陸の明・清である以上、支那側史料も重用し、支那の歴史事件も考慮せらるべきであるにも拘らず、かゝる論文の皆無であつたのは如何した事であらう。

本書は此の跛行的なる鎖國時代長崎貿易の研究を、矯正する意圖の下に書かれたものである。

著者矢野仁一博士は「近代支那史」の名著を以つて夙に世に知られた支那近世外交史研究の老大家である。かゝる日本の貿易史は、或は博士の本領と言へぬかも知れない。然しながら、博士も序文に言つて居られる如く、「我が鎖國時代において事實上支那以外に長崎に通交貿易した東洋諸國はなかつた」事、而も支那側史料を自在に驅使しながら、眞に東洋史の立場から本問題を研究し得る人は、著者を措いて他に求められない事に思を致せば、最良の人が最適の研究をなしたと言つても過言ではない。以つて委囑者前長崎圖書館長、故永山時英氏も冥すべきであらう。

本書は十數年の日子を以つてものせられた全十章・七百十九頁に亘る長編で、嘗つて一章を成す毎に雜誌に載せて、世の批判を求められたものが本書の骨子となつてゐる。第一章は序論と言ふべく、第二章以下第六章迄は本論と見るべく、第七章以下を餘論と解してよいやうである。目次を掲げよう。

## 第一章 徳川時代に於ける長崎の支那貿易

第二章 永祿寛永時代の長崎の支那貿易

第三章 寛永貞享時代の長崎の支那貿易

第四章 貞享以後の長崎の支那貿易

第五章 正徳新例前の長崎の支那貿易と正徳新例

事情

第六章 享保以後の長崎の支那貿易

第七章 支那の記録から見た長崎貿易

第八章 長崎貿易時代初期の絲割符法

第九章 長崎貿易最隆盛時期の支那輸入貨物

第十章 長崎貿易における銅及び銀の支那輸出

鎖國時代の長崎貿易を、

永祿五年(西紀一五六二)——寛永十二年(西紀一六三五)  
(嘉祿四一年) (崇禎八年)

寛永十二年——貞享二年(西紀一六八五)  
(康熙二十四年)

貞享二年——正徳五年(西紀一七一五)  
(康熙五十四年)

正徳五年——開國

の四時期に區分せられた事は、勿論博士獨自のものである。言ふ迄もなく、寛永十二年は日本の對外貿易が長崎一港に限られた年である。こゝに一期を劃すのは誰しも異存のない所であらう。此の時迄の貿易は大體自由貿易であつたとされる。

貞享二年を以つて時期を劃された理由は、第三章八十五頁に述べられてゐる。

「支那の貿易額の限定された貞享二年は、支那においても清朝が臺灣を平定したる結果、大いに海禁を開き、外國貿易を許した年で(筆者註、但し日本の往、支は許されなかつた)、

この年を以て長崎における支那貿易の歴史の第二時期を劃すれば、その第一時期は、大體において明の政令の支那に行はれた時代で、支那の私商が、貿易の禁を犯し、零碎の貨物を齎らして、長崎その他の諸港に出入して、小利を求めしに過ぎない時期であるに對して、この第二時期は明清交代に際し、明の政令が行はれず、清朝の威權も確立せず、鄭氏一門が或は福建海上において、或は臺灣に據りて、實際において殆んど支那の全輸出貿易を支配した時期に恰當する」

著者が此の長崎貿易史を、常に東洋史の立場から取扱つて居られる事を示す好例である。この第二時期には從來の絲割符法が廢止されて、相對商賣となり、後に市法商賣法の制定を見るに至つたが、これら重要問題を第三章で説明される。

次に正徳五年には、國內に於ける銅の不足が問題となり、その結果新例の發布を見、信牌制度を設けてその貿易を嚴重に限定するに至つた事情を以つて、劃期的なものとされた。その特色を日支兩面から考察して第五章に詳論され、貞享二年以來の商人の相對入札商賣がこの新例によつて値組貿易となり、この商賣法は幕末に及んだとして、前後の時期を明確ならしめられた。即ち第三時期には、市法商賣法が、生絲は割符法諸色は相對商賣となり、貿易額が限定されて、その制限は嚴重となつて行つた事を述べられ、この時期を正徳新例發布の準備期と見られた。第四時期は、銅の不足から貿易の制限が益々嚴重となり、日本の輸出品として俵物や諸色等の海産物が重要な地位を有することゝなつた點を注意されてゐる。

明末より盛んに東洋へ押し寄せて來た西歐商人が、目ざましく活躍した東洋貿易に於いて、重要な役割を演じたものは銀であつた。これらの銀は支那の絹織物と金、モルッカ諸島の香料、日本の食料品等の支拂に用ひられ、結局廻り廻つて支那へ吸收されて行つた。この目まぐるしい東洋貿易と、長崎貿易とは沒交渉で

はあり得なかつた。又銅も支那が鑄錢料として渴望したものであり、日本の良質なる銅鑛は支那人の間によく知られてゐた。この點より、我々の興味を惹かれるのは、寧ろ第七章以下であり、それこそ博士の獨壇場とも言ふべく、深き東洋史の理解、貿易關係の把握あつて始めて成し得る所であらう。

さて第七章には、從來史家によつて試みられず、又その必要さへも注意せられなかつた「支那側史料に依る長崎貿易」の研究を、新しく試みられたものである。

明朝、清朝共に諸外國との貿易を禁じてゐたが、たゞ除外例として、支那人が日本へ赴くことを認めてゐた。又寛文元年から貞享元年の間は、清朝の順治十八年以後康熙二十三年に相當し、所謂遷海令を出して、支那沿海の民を支那里三十里の内地へ遷し、漁船、商船の出海を嚴禁した時代であるが、この間も支那人が日本へ赴くことは禁じてゐない。この理由を、支那が日本の銅即ち洋銅を必要としたからであると説明された。元祿十一年頃から銅の流出を制限し初め、正徳新例の發布を見るに至る間は、清朝では日本の銅を採辦し難くなつて、雲南からの採銅に努めたが、その質惡

く、鑄錢料として日本銅の需要は絶えなかつた。かくて日本銅の採辦は容易でなかつたが、年々銅を求めて日本へ來たのである。支那人の日本へ赴く事を許しながら、康熙二十三年の海禁解除後と雖も、日本人が支那に往く事を禁じてゐた。之は支那が日本人の侵寇を常に疑懼してゐた結果であるとして、種々例證された。

第八章に於いて、生絲は長崎貿易時代の初期、中期にかけて、支那船、和蘭船の輸入品中最も重要なものであつたから、隨つて絲割符法は當時にあつて最も重要な制度であつたとし、その字義に關して横井時冬博士説を捨て、本庄、柴兩氏説を支持され、その由來、制度、廢止の理由等を考へられた。

第九章は長崎貿易の最も隆盛であつた初期、中期の支那からの輸入貨物名を列舉し、それらの貿易によつて支那人の得た利益を日支雙方の時價を對照せしめながら考究された。

第十章は、日本の銅輸出禁止は、金銀の輸出禁止よりも早く、寛永十四年(一六三七年)よりなされ、正保三年(一六六〇年)には、その輸出が解禁となつた。その銅の輸出量、解禁の事情、銅の相場をあげられる。

日本の銀は寛文八年(一六六八)に輸出禁止となつたが、それには絲割符法が相對貿易となつた爲め、生絲の買入値段が高値となり、長崎の衰微を來たしたと云ふ重大な原因があつた事、又その銀の輸出が寛文十二年(一七二六)に解禁された事情を述べ、つゞいて正保五年以前と以後この頃迄との日本銀輸出の額を計算された。

本書に引用された史籍は、日本のものは言ふに及ばず、支那、歐羅巴のものにまで及び、その一々に付いては敢て新奇と言へないが、これらを常に一貫した立場から驅使されること縦横無盡、その博引旁證は實に驚嘆に値する。又日本和蘭側史料では解決出來なかつた問題を、明確に説明された事も少なくはないが、煩を厭うて舉例を差し控へる。

本書では、英・米・佛の日本への進出、所謂阿片戰爭以後の支那貿易事情の變化が、日本即ち長崎の貿易に及ぼした影響、そして長崎貿易をして變態的な狀態から開放せしむるに至つた事情、その間に於ける支那との貿易關係等には觸れられてゐないことに、やゝ物足らなさを感じる。然し之を補ふものは、博士の諸著書に求められるであらう。

又著者自らも言はれる如く、九州地方殊に薩摩の密貿易史は、長崎貿易の裏面史とも言ふべき、甚だ重要なものであるが、之を割愛せられた事は遺憾この上もない。強ひて瑕瑾を拾ふ事は不可能ではない。又異説を立てる事も出来よう。神ならぬ人間の作品は、常に未完成である。然しそれは決して本書の價值と意義とを動搖せしめるものではない。繰り返へして言ふ。

舊き問題を東洋史の立場から取り上げられ、之をも鼎の一脚たらしめられた功は永久に銘記せらるべきであらう。この基礎に立ち、更に、當時「天下の台所」として、全國の富の七割までを集めたと稱せられる大阪經濟と、その輸血管なるべき長崎港との關係、近畿地方絹織物業と長崎に於ける絹生絲貿易との關係等、重要且つ興味ある研究にまで發展せしめられねばならない。〔堀井一雄〕